



特集によせて：演奏研究のプラットフォームを求めて

正田，悠

(Citation)

ヒューマンインタフェース学会誌, 20(4):221-221

(Issue Date)

2018-11

(Resource Type)

journal article

(Version)

Version of Record

(Rights)

本著作物の著作権は特定非営利活動法人ヒューマンインタフェース学会に帰属します。本著作物は著作権者であるヒューマンインタフェース学会の許可のもとに掲載するものです。ご利用に当たっては「著作権法」に従うことをお願い致します。

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90006445>



Special Issue

演奏のインタフェース 特集

特集によせて：演奏研究のプラットフォームを求めて

神戸大学大学院 正田 悠

人間にとって、音楽の演奏は実に日常的なものです。趣味として歌を歌う人や楽器を演奏する人は多く、音楽学部のない大学のピアノサークルに100人以上の学生が所属していることも珍しくありません。仲間とのコミュニケーションやストレス解消等でカラオケに行く人は年代を問わず多いですし、ニコニコ動画やYouTube等の動画サイトでは「歌ってみた」、「弾いてみた」、「踊ってみた」といった動画が溢れ、主要コンテンツの一つとなっています。

しかし、とりわけ“演奏”という着眼点でどのような研究が進められているかはあまり知られていないのではないかと思います。国内には音楽に関連した学会もいくつかありますが、音楽にアプローチした研究は、むしろいろいろな分野の学会で点々と見受けられることの方が多いように思います。そのような中で、2017年にアイスランドで開催された国際演奏科学シンポジウム (International Symposium on Performance Science 2017, <http://www.performancescience.org/ISPS2017/>) は印象的でした。日本から飛行機で17時間はかかるにもかかわらず、日本からの参加人数はなんと世界第二位だったのです。このとき筆者は日本が演奏科学研究の先端を走りうる可能性を秘めていると感じましたし、実際にそうしたプラットフォームを構築する必然性が固まってきたと思いました。

そこで、今回は、ヒューマンインタフェースという学際領域の読者の皆様

に向けて、最先端の演奏研究をメッセージとしてお届けするため、“演奏”を切り口とした研究開発について紹介する場を設けました。まず、第一の記事は筆者が担当し、音楽演奏の古典的研究と私自身の研究も交えながら、演奏そのものを計測したり、鑑賞者の反応を測定することによって、どのように演奏表現について知ることができるのかについて述べました。第二の記事は、大阪大学の後野光覚先生に現在プロジェクトで進めておられる「生体情報のアート化」に関する記事をご寄稿いただきました。心電図や筋電図といった生体信号を“アート”にすることで思わず身体が動いてしまう、そんな楽しいシステムの開発に携わっておられます。第三の記事は八戸工業大学の三浦雅展先生にご寄稿いただき、先生ご自身が進めてこられた研究開発の中から音楽演奏や音楽聴取と関連するシステムについて述べていただきました。第四の記事は大阪大学の河瀬諭先生に演奏とコミュニケーションの話題についてご寄稿いただきました。音楽は、会話とは異なるかもしれませんが、その特性からしてまさにコミュニケーションの媒体といえます。そのようなコミュニケーションとしての演奏について定量データを交えながら解説していただきました。第五の記事は音楽を通じた認知症医療に携わってこられた産業技術大学院大学の田部井賢一先生にご寄稿いただきました。認知症に関する解説に加え、音楽療法の効果を科学的に証明しようとする田部井先生の挑戦をご覧ください。

“演奏”を取り巻く状況はここ数年の間でも刻一刻と変化しています。作曲家が手を汚しながら紙の上にインクとペンで楽譜を書くようなことは少なくなりました。作曲作業のほとんどはコンピュータの中で完了します。演奏するのにもう訓練も楽器も必要ありません。特殊な技能をもたずともボーカロイドに歌ってもらうことができます。ハイレゾ音源と呼ばれる超高音質の音楽もすでに特別なものではありません。再生可能なスピーカーやヘッドフォンをもっていれば誰でも簡単に手に入れることができます。音楽は携帯電話(スマートフォン)で持ち運ぶものとなり、一日に5時間も6時間も音楽を聴き続ける若者がたくさんいます。特別養護老人ホームの入居者は年々増える一方ですが、そこでは毎週のように音楽プログラムが展開されています。このような状況は、10年前にはほとんど誰も想像できていなかったのではないのでしょうか。アラン・ケイが「未来を予測する最良の方法は未来そのものをつくってしまうことだ」と述べたように、これからの未来においても、音楽や演奏の姿はどのような形にも開かれていると思います。そうであるからこそ、音楽・演奏の未来を創造し、追い求める楽しさが研究者であるわたしたちにも残されているといえます。

今回の特集が読者の皆様にとって“演奏の科学”を考えるきっかけとなれば幸甚に思います。最後に、今回の特集記事を快く引き受けてくださった執筆者の皆様に心から感謝を申し上げます。